

第一章 序論

1-1 研究の背景

地球の環境をまもっていくために私たちがしなくてはならないことは多い。その中に循環型社会の形成というものがある。循環型社会ではゴミをゴミとして扱わないことが重要だ。例えば空き缶をリサイクルしたり、使わなくなった物を誰かに譲ったりといったようなことだ。そういう点において、図書館で本を借りることも 1 冊の本を数人で共用していることとなり、一人ひとりが書店で購入する場合に比べ、本の生産に必要な紙資源の消費を抑えることになる。しかし、資源の面ではよいとされるリサイクルも環境に負荷をかけるわけではないわけではない。リサイクルをしても資源以外の面で環境負荷が大きくなるケースもある。たとえ図書館利用という行動がリユースのようなものであっても、移動する際に自動車などから排出される CO₂ に目を向ければ、必ずしも環境によいと言えないかもしれない。

1-2 研究の目的

彦根市を対象として、図書館を利用することが CO₂ 排出量の面から考えても環境に良い行動であるのか明らかにする。そのためにまず本の利用によって彦根市全体で実際にどのくらい CO₂ が排出されているのか推定する。

次に、その推定を参考に CO₂ 排出量に影響する幾つかの要素を変動させて「図書館を利用する場合」と「書店で本を購入する場合」とを比較し、図書館や書店の利用状況の違いによって CO₂ 排出量がどの程度違うのかを考える。

最後に、図書館の存在が及ぼしている影響を推定する。要約すると以下の通りである。

本の利用による CO₂ 排出量の現状を推定（第四章）

利用状況別に図書館と書店を比較（第五章）

図書館が及ぼしている環境への影響（第六章）

1-3 研究の意義

地球温暖化防止のためにも CO₂ 排出量を出来るだけ削減しなければならない。環境負荷の少ない本の利用方法を明らかにすることで、僅かでも環境負荷を抑えた社会をつくることに貢献できると考える。

1-4 研究の方法

まず、CO₂ 排出量の算出方法を定める。書店、図書館への移動手段は徒歩、自転車、自家用車、バイク、バスを想定しておく。

次に、現状を推定するためのデータ収集のために、図書館、書店へのヒアリングと利用者に対するアンケートを行う。そのデータをもとに計算を行い図書館と書店の比較を行う。

図書館は彦根市立図書館を、書店は彦根市内にある書店 A を対象とする。なお書店 A の集客力、品揃えは市内随一である。